

8 鶏の閉鎖群育種による後代調査

(I) 白レグ B 系統 33 T-7 家系について

名 倉 清 一 齊 藤 季 彦

齊 藤 伝 吉

1 はじめに

當場種鶏は、昭和38年までは白レグ A、B、C、D の4系統、ロード K、P の2系統、横班ロック、ニューハンプシャー、ホワイトコーニッシュ、ホワイトロック種各1系統の計10系統をもち、白レグは相反反覆撰抜育種に基づく改良育種を進め、その他の品種は系統繁殖により改良を進めてきたが、外国鶏の急速な進出に対処するため、昭和38年国において、全国都道府県養鶏関係施設の種鶏（白レグ）から優良家系を抽出し、国および地方を通じての国内鶏の総合育種計画がたてられた。

當場白レグ B 系統 33 T-7 家系も卵数系の優良家系として撰定されたので、昭和39年度より系統および品種を整理し、B 系統の増飼を計り、昭和40年度には米国ブレンダー農場より白レグの卵重系を輸入し、兼用種はロード P 系統のみとし、この3系統を重点的に改良育種することになった。なお、この3系統は全国区および東日本地区の実用鶏生産のための組合せ検定の基礎系統となったので、系統の規模も拡大し、改良育種の方法も閉鎖群育種に切替、それぞれの系統の特徴を明確にし、その性能の向上をはかることとした。

2 基礎系統の概況と改良目標

(A) 白レグ B 系統

この系統は元中央家畜研究所（東京都下）の系統で、T 7 6 3 鶏の後代を昭和26年より当場でまとめて B 系統とした。昭和32年より相反反覆撰抜育種に準じて改良を進め、昭和38年全国都道府県施設 1924 家系中より卵数系統として抽出された系統である。今後の改良目標は卵数系統としての性能の維持と、統一性の向上を図る。

(B) 白レグ Br 系統

この系統は昭和40年米国 B R E N D E R 農場より卵重系統として輸入し、昭和41年度より東日本地区組合せ検定の卵重系統として抽出された。

今後卵重に重点をおいた撰抜交配を行ない、その特徴を明確にする。なお、この系統は昭和41年農林省に購置され岡崎種畜牧場に飼養され、その雄の1部は白河種畜牧場の42年度組合せ計画の中に組み入れられている。

(C) ロード P 系統

この系統は戦後国で輸入したバーメンター系を旧大宮種畜牧場より譲渡を受け、その後閉鎖群として改良してきたもので、昭和41年度より東日本地区組合せ検定の異品種としての系統である。白レグとの2元、3元、4元雑種に用いる基礎系統であるので、産卵性、強健性の向上を図りつつ、特に白レグB系統Br系統などとの組合せ撰抜により、相性の維持向上を図る。

以上3系統のうち、白レグB系統の後代成績を示せば次のとおりである。

3. 白レグB系統(33T-7家系)

(A) 家系の成立(26年~32年)

昭和24年都下北多摩郡の種鶏検査の折、この地区で比較的成績をあげている鶏の系統は中央家禽研究所の廃止前後同所より譲り受けたものが多いように見受けられ、同所の系統について北多摩郡の主な種鶏場の系統調査によって、200-1家系が特に優れていることがわかったので、その後代であるT763鶏(雄)を譲り受け(坂本種鶏場)、昭和26年同系の検定出品鶏を利用して後代を採種した。

(B) 相反反覆撰抜法に準じた改良繁殖をした当時の成績(33年~37年)

昭和32年から場の白レグの改良繁殖計画は、相反反覆撰抜育種に準じた方法で進められることになり、白レグA、B、C、D4系統のそれぞれの相性の良い相対する系統の選定を行なうため、特に検定年、繁殖年を明確にすることなく、純系繁殖と、組合せ選定のための交配とを同時に行なった。33年、34年は主としてA系、C系の相対する系統の選定を行ない、B系、D系は35年から37年に行なった。

なお、白レグ4系統の概況は次のとおりである。

A 系統 = 旧大宮種畜牧場の13-30系の後代で、産卵性は高いがやゝ小雛小卵の系統である。

B 系統 = 基礎系統の概況で説明のとおり。

C 系統 = 宮城県岩谷種鶏場C1266の後代で、産卵の持続性がある中雛中卵の系統である。

D 系統 = 昭和27年アメリカハリウッド農場より輸入した系統で、産卵性はやゝかけるが、大卵の系統である。

1.) 33年はA系、C系が主として繁殖されたが、33年B系の後代を残す関係で、純系繁殖が一部行なわれ、その時に採取されたのが、33T-7および33T-1、33T-2である。(別図参照)34年もA系、C系が主体の繁殖であったが、後代を残す関係で、

33 T-7 から 34 T-87 や 59 T-730 など采取了。この子雌の成績は、第1表のとおりで比較的優れていた。

第 1 表 34 T-87 の姉妹鶏の能力 (33 T-7 の子雌)

番 号	産 卵 数	平 均 卵 重
597-730	282	58.1
" 737	274	56.7
" 758	296	55.2

2) 35年B系は純系繁殖に33 T-7、33 T-1を父鶏として用い、34年採取した子雄について、異系統(D系)と交配してその組合せ能力を見た。その成績は第2表のとおりである。

第 2 表 昭和35年鶏の成績

父 鶏	母鶏羽数	交配方法	子 雌	子 雄	初産日令	体 重	平 均	平均
		雄 雌	調査羽数	終了羽数			産 卵 数	卵 重
33 T-7	3	B×B	11	6	186	1,750g	259個	57g
33 T-1	5	B×B	16	8	193	1,730	250	58
34 T-90	3	B×D	19	7	181	1,640	243	60
34 T-87	6	B×D	15	11	180	1,620	261	57
34 T-5	6	B×D	9	7	192	1,790	249	55
34 T-2	4	B×D	6	5	203	1,930	254	55

3) 36年は35年に引き続き、33 T-7および33 T-1を純系繁殖に使用し、35年採取した。33 T-7の子雄について異系統を交配してその成績を検討した。その成績は第3表のとおりである。

第 3 表 昭和 36 年 鶏 の 成 績

父 番 号	母鶏 羽数	交 配 方 法 雄 雌	子 雄 調査羽数	子 雌 終了羽数	初産 日令	10ヶ月令 体 重	10ヶ月令 卵 重	初産から 100日間 産卵強度	平 均 産卵数
33T-7	4	B×B	19	17	163	1,859 g	55.0 g	76.8%	281個
33T-1	4	B×B	20	9	198	1,713	58.4	76.6	235
35T-92	5	B×D	19	13	181	1,800	57.1	78.4	271
35T-93	5	B×(A×C)	12	10	218	1,779	58.0	93.0	271
35T-94	5	B×(A×C)	10	9	192	1,640	54.5	78.9	258

- 4) 37年は36年に引き続き36年に採種した33T-7の子雄(別図参照)について異系交配をし、その組合せ能力を検討した。その成績は第4表のとおりである。

第 4 表 昭和 37 年 鶏 の 成 績

父 番 号	母鶏 羽数	交 配 方 法 雄 雌	子 雄 調査羽数	子 雌 終了羽数	初産 日令	10ヶ月令 体 重	10ヶ月令 卵 重	初産から 100日間 産卵強度	平 均 産卵数
36T-33	5	B×C	11	8	180	1,567 g	52.7 g	77.1%	270個
36T-34	7	B×A	20	16	180	1,621	57.3	78.8	280
36T-47	4	B×D	4	3	185	1,783	58.2	71.2	287
36T-48	4	B×D	5	5	175	1,580	57.2	74.1	250
36T-49	6	B×D	8	7	185	1,563	57.1	74.7	257

- 5) 以上3ヶ年の成績から、33T-7は純系繁殖においては産卵性、強度性、初産日令など異母兄弟の33T-1より優れている。

なお、子雄の異系交配の成績も、34年採取した33T-7の子雄である34T-87は他のものより優れた成績を示し、同じく35年度33T-7より採取した子雄の成績は、第3表の36年鶏の成績が示すとおりであり、36年度33T-7より採取した子雄の成

結果も第4表、37年鶏の成績とおりで比較的どの系統に交配しても、その成績はよく安定した結果が得られた。

- 6) 昭和33年から37年に実施した成績から、白レグA、B、C、D4系統のうちA系のうちA系はC系に、C系はA系との交配が比較的ヘテロシスが表われていたため、A系の相対する系統としてC系を撰定した。B系の相対する系統としてD系が最もよい成績とはいえないが、どの系統に交配しても比較的安定していることと、A系、C系を相対する系統として撰定したため、B系は、D系と相対する系統として相性の向上を図るよう育種すれば、相当の効果が期待できるものとして、昭和38年より本格的に相反反覆撰抜育種に入る予定である。

(C) 相反反覆撰抜法を閉鎖群育種に切り替えた理由

昭和38年頃より進出してきた外国コマーシャル鶏の成鶏の強健性、卵重など明らかに従来の国内鶏より優れていることがわかり、従来の育種方法を進めることの良否について、国でも民間でも検討されてきたが、改良育種の方法は別に誤まっているわけではなかったが、限られた羽数(定数内)で個々が従来の改良育種を行なうより、国および都道府県が協力して優良系統を選定して、その優良系統について改良育種の規模を拡大して行なうことが、より早くその効果が期待できるということから、38年国において都道府県施設の繁養種鶏より優良家系を抽出し、国および地方を通じての総合育種計画が立てられた。

当场B系統33T-7家系も、上記の成績から優良家系の卵数系統として抽出されたので、場の改良育種もその線にそい飼養品種、飼養系統を整理し33T-7家系の飼養規模を拡大し、閉鎖群育種に切り替えた。

(D) 閉鎖鶏群育種に切り替えてからの後代の成績

1) 昭和38年の繁殖成績

昭和38年は、上記(B)の計画によりB系統は繁殖年に該当する年であったので、第5表のような純系繁殖を春期に行なったが、38年度後期に入って、上記(C)のような理由で、39年鶏からB系統の規模拡大を図り、本格的に閉鎖群育種とした。

38年は33T-7鶏は5才鶏となり、老鶏であったが上記(B)のような成績であるので、その後代を何羽でも採種するために用いた。34T-87は上記(B)の成績のように、姉妹鶏およびD系統との組合せ能力から純系繁殖用に用いた。その成績は第5表のとおりである。

第 5 表 昭和 38 年 鶏 成 績

父 番 号	母 番 号	近交係数	短 期 成 績 (初 産 より 100 日 間)						10月令 卵 重	周 年 成 績		
			開始 羽数	終了 羽数	終了率	産卵率	産 卵 強 度	初産日令		開始 羽数	終了 羽数	終了率 産卵個数
34T-87	61T-1190	30.95	2	2	100%	78.5%	78.5%	168.0	52.5g	2	2	100% 259.0
"	" 1181	"	5	5	100	61.6	77.2	179.0	54.8	5	5	100 272.4
"	" 1193	"	4	4	100	68.8	78.8	172.8	55.3	4	4	100 263.8
"	" 1187	"	4	3	75	67.7	76.3	185.3	52.3	3	1	33.3 240.0
"	" 1194	"	7	7	100	64.9	71.4	193.3	53.2	7	7	100 246.7
"	" 1191	"	4	4	100	71.5	75.5	160.0	54.2	4	4	100 272.0
"	" 1195	"	3	3	100	78.0	78.0	172.3	58.8	3	3	100 269.0
"	" 1184	"	6	6	100	73.3	77.5	171.0	57.2	6	5	83.3 268.4
"	" 1198	"	3	3	100	70.3	75.7	172.3	55.5	3	2	66.7 269.5
計及平均	9 羽		38	37	97.4	70.5	76.5	174.9	54.9	37	33	89.2 262.3
33T-7	61T-1118	10.74	4	4	100	75.3	82.5	173.8	50.7	4	3	75.0 260.0
"	" 1172	46.09	3	3	100	81.0	81.0	169.3	61.2	3	3	100 265.3

計及平均	2 羽		7	7	100	78.2	81.8	171.6	2,067	56.0	7	6	85.7	262.7
合計 及平均	11 羽		45	44	97.8	74.4	79.2	173.3	1,945	55.1	44	39	88.6	262.5

昭和38年度の調査鶏の近交係数は第5表のとおり46.09、30.95など相当高い近交度のものが大部分である。

産卵期間の調査は周年無淘汰で実施した。初産から100日間の短期産卵率は74.4%、初生日令173.3日、10ヶ月令体重1945g卵重55.1g初産から1ヶ年の残存率は86.7%で、残存鶏(終了鶏)の平均産卵個数は262.5ヶであった。

2) 昭和39年の繁殖成績

昭和39年は37年、38年に33T-7家系として採取した雄に、B系統に属する36年37年38年鶏の雌の殆んどを用いて繁殖した。39年はB系統の規模の拡大を図り、強い近交をさけた閉鎖群としての繁殖に切り替えた。その成績は第6表のとおりである。

第 6 表 昭和 39 年 鷄 成 績

父 番 号	母 鷄 羽 数	短 期 成 績 (初 生 日 間)					10 羽 令		周 年 成 績 (365 日 間)			
		開始 羽 数	終了 羽 数	終了率	産卵率	初産日令	体 重	卵 重	開始羽数	終了羽数	終了率	平均産卵数
38T-139	2	13	13	100%	73.9%	210	1,839g	52.6g	7	7	100%	301
140	5	33	33	100	82.7	200	1,890	58.1	24	23	95.8	301
141	3	22	22	100	83.3	192	1,627	52.6	13	13	100	290
142	7	66	66	100	79.2	190	1,758	53.1	31	31	100	286
143	4	25	25	100	79.2	195	1,741	53.5	6	6	100	300
144	3	36	36	100	78.5	193	1,665	52.0	17	17	100	288
145	3	36	36	100	71.9	204	1,893	54.1	19	17	90.0	281
37T-49	6	42	41	97.6	75.9	206	1,754	53.7	13	13	100	277
53	7	50	50	100	82.9	198	1,857	53.2	22	22	100	292
69	5	39	39	100	76.9	187	1,651	53.7	11	11	100	274
73	3	18	14	83.1	69.3	212	—	—	—	—	—	—
計及平均	48	380	375	98.7	77.6	198	1,768	53.7	163	160	98.2	288

本年度の採取は強い近交をさけた近親交配とし、1親雌当り5羽の子雌を採取することに努めた結果、大部分は5羽以上の採取ができたが、一部は5羽以下のものもあり、最少は2羽最大は18羽で、平均7.9羽であった。

育成率は93%で、産卵期間の短期調査(初産より90日間)は無淘汰で実施したその結果は残存率98.7%産卵率77.6%と38年鶏よりはそれぞれ0.9%、3.2%すぐれた成績を示した。

体重は平均4.768gで、38年鶏より177g少く、10ヶ月令卵重は平均53.7gで38年鶏より1.4g小さかった。初産日令は1.98日で38年鶏より25日長かった。

周年調査は飼養羽数の都合で短期調査終了鶏375羽の43.5%に当る163羽について行なった。その平均産卵数は288ケであった。

3) 昭和40年の繁殖成績

昭和40年は昭和39年の繁殖と大体同じように強い近交をさけた繁殖とし、本年は39年繁殖に用いた38年鶏雄で40年春の繁殖時健在で39年繁殖の子雌の短期成績の優れているもの3羽と、39年鶏8羽を使用し、雌は38年～36年鶏のB系に属するもの全部と、39年鶏の一部を用いた。その成績は第7表のとおりである。

第 7 表 昭和 40 年 鶏 成 績

父 番 号	母 鶏 羽 数	短 期 成 績 (初産より 100 日間)					10ヶ月令		周 年 成 績 (365 日間)			
		開始羽数	終了羽数	終了率	産卵率	初生日令	体 重	卵 重	開始羽数	終了羽数	終了率	平均産卵数
38T-140	3	15	15	100%	82.0%	164日	1,839g	598g	9	8	88.9%	225個
38T-141	8	35	34	97.1	82.8	164	1,620	567	17	17	100	253
38T-143	8	41	40	97.6	82.6	164	1,727	538	22	20	90.9	265
39T-6	6	36	36	100	84.9	169	1,768	60.4	21	16	76.2	243
39T-12	4	18	18	100	62.8	160	1,840	56.0	8	6	75.0	243
39T-20	3	13	13	100	79.7	173	1,871	54.4	5	5	100	253
39T-42	6	23	23	100	79.3	171	1,975	61.1	6	5	83.3	246
39T-77	6	37	37	100	85.2	181	1,757	54.5	19	16	84.2	259
39T-100	5	27	27	100	86.5	160	1,786	55.9	21	19	90.5	261
39T-114	5	16	16	100	88.9	168	1,738	54.7	10	10	100	294
39T-120	2	3	3	100	81.8	173	—	—	—	—	—	—
計及平均	56	264	262	99.2	83.3	168	1,792	56.7	138	122	88.4	257

40年繁殖の育成率は95%で、39年鶏よりは2%優れていた。産卵期間の成績は第7表のとおりで、初産より100日間の斃死は2羽で、残存率99.2%と39年鶏よりは良く、産卵率も83.3%と39年鶏より5.7%優れた成績を示した。

初産日令も168日令で、39年鶏より優れ、卵重も56.7gと39年鶏よりは改善された。体重は1,792gで39年鶏よりは若干重いが大差はなかった。

周年調査は短期調査終了鶏262羽より52.7%に当たる138羽について実施した。その結果は残存率88.4%平均産卵数257ケで、39年鶏よりはそれぞれ劣る成績であるが、調査期間の終期の9月25日台風26号により鶏舎一棟が倒壊し、倒壊鶏舎の鶏を収容するため移動密飼、浸水の後仕末など無理が重なり、産卵の急激な低下をきたしたためであり、短期成績を前年度の39年鶏と比較すると、むしろ優れた成績を示しているので、遺伝能力の低下とは考えられない。

4) 昭和41年の繁殖成績

昭和41年は昭和38年採取した雄で、39年40年に後代の能力を調査し成績の優れていた、38 T-140、38 T-143より40年に採取した雄を用いて繁殖に供した。

41年3月16日、4月20日、5月3日の3回に686羽の餌付を行ない、その育成成績は第8表のとおりで、150日令までの育成率は93.0%であったが、表が示すとおり脚弱症状を表わすものは、雄で6羽、雌で16羽あり、解剖の結果、全部神経型淋巴腫症とは診断できなかったが、疑わしいもののがかなりあったので、脚弱症状を表わした鶏の全姉妹鶏は種鶏から除外して応用払下とし、雄の候補は脚弱症状を1羽でも表わした家系は除外し、1羽も脚弱症状を表わさなかった40 T-6、40 T-31から採種した。雌は脚弱症状を表わした鶏の全姉妹鶏を淘汰用としたので、150日令まで育成した雌雄407羽中351羽を抽出して産卵試験に供した。

産卵期間の調査は現在実施中であるが、その短期の成績は第9表のとおりである。

第 8 表 昭 和 4 1 年

3 月 1 6 日、4 月 2 0 日、5 月 3 日 餌 付

父 番 号	母羽数	雄									
		餌付	脚弱	痛風	闘争	斃死 とう太	落番 その他	残羽数	餌付	脚弱	痛風
4 0 T-3	1 3	1 9	—	—	—	—	2	1 7	4 5	4	1
4 0 T-4	1 3	1 8	1	—	—	2	1	1 4	3 9	3	—
4 0 T-5	8	6	1	—	—	1	—	4	2 2	1	—
4 0 T-6	8	4 0	—	—	—	3	3	3 4	4 5	—	—
4 0 T-1 0	9	2 0	1	—	—	2	3	1 4	4 2	2	—
4 0 T-2 4	9	2 2	2	—	—	—	1	1 9	3 8	1	—
4 0 T-2 7	1 6	3 2	—	1	1	2	3	2 5	7 9	3	—
4 0 T-2 8	1 4	2 4	—	1	—	1	3	1 9	8 7	2	—
4 0 T-2 9	9	1	1	—	—	—	—	0	2 6	—	—
4 0 T-3 1	8	4 5	—	1	1	1	5	3 7	3 6	—	—
計 1 0 羽	1 0 7 羽	2 2 7	6	3	2	1 2	2 1	1 8 3	4 5 9	1 6	1

- 註) 1 脚弱は全部神経型淋巴腫症とは判定できなかったが脚弱症状を表し
2 兄弟鶏も場候補雄種鶏および抽出家系交換鶏から除き応用とした。

白レグB系統家系別育成成績

150日令まで

雌				計								育成率落番 を含む %
闘争	斃死 とう太	落番 その他	残羽数	餌付	脚弱	痛風	闘争	斃死 とう太	落番 その他	残羽数		
—	—	7	3 3	6 4	4	1	—	—	9	5 0	9 2. 2	
—	2	1	3 3	5 7	4	—	—	4	2	4 7	8 6. 0	
—	—	—	2 1	2 0	2	—	—	1	—	2 5	8 9. 3	
—	—	1	4 4	8 5	—	—	—	3	4	7 8	9 6. 5	
—	2	1	3 7	6 2	3	—	—	4	4	5 1	8 8. 7	
—	—	—	3 7	6 0	3	—	—	—	1	5 6	9 5. 0	
—	2	—	7 4	1 1 1	3	1	1	4	3	9 9	9 1. 9	
—	—	1 6	6 9	1 1 1	2	1	—	1	1 9	8 8	9 6. 4	
—	—	—	2 6	2 7	1	—	—	—	—	2 6	9 6. 3	
—	2	1	3 3	8 1	—	1	1	3	6	7 0	9 3. 8	
—	8	2 7	4 0 7	6 8 6	2 2	4	2	2 0	4 8	5 9 0	9 3. 0	

た姉妹鶏は場候補種鶏から除外した。

第 9 表 昭和 41 年 鶏 の 成 績

父 番 号	母 鶏 羽 数	短 期 成 績 (初産より100日間)					10ヶ月令		周 年 成 績			
		開始羽数	終了羽数	終了率	産卵率	初産日令	体 重	卵 重	開始羽数	終了羽数	終了率	平均産卵数
40T-3	12	27	26	96.3%	72.7%	174	1,806g	52.6g				
40T-4	12	31	30	96.8	81.2	172	1,742	51.9				
40T-5	7	20	19	95.0	79.6	172	1,854	53.2	実 施 中			
40T-6	6	39	39	100.0	75.7	176	1,972	56.4				
40T-10	6	30	30	100	71.4	184	1,876	56.6				
40T-24	7	26	26	100	79.0	165	1,669	54.6				
40T-27	15	63	62	98.4	77.7	170	1,704	53.1				
40T-28	13	61	61	100	77.0	170	1,966	56.5				
40T-29	8	25	25	100	77.0	165	1,913	56.6				
40T-31	6	29	29	100	80.1	174	1,840	54.2				
計及平均	92	351	347	98.9	77.1	172	1,885	54.8				

産卵成績は現在調査中であるが、短期成績は残存率 98.9%、産卵率 77.1%、初産日令 172 日、10ヶ月令体重 1885 g、10ヶ月令卵重 54.8 g と 39 年鶏と 40 年鶏の短期成績のはば中間の成績で、特に向上した成績は得られていないが、調査鶏（種鶏）撰抜にあたっては、第 1 に育成中多少とも神経型淋巴腫症の発生があったもの、姉妹鶏、兄弟鶏を徹底的に除去する方針をたて、産卵能力は第 2 にして撰抜した関係もあると思われる。

4 要 約

以上、白レグ B 系統 33 T-7 家系についてその家系の成立、相反反覆撰抜育種当時の成績の概要、閉鎖鶏群育種に切り替えた経過と、その後の後代の繁殖概況と成績について述べたが、閉鎖群育種に切り替えてからの総合成績は第 10 表のとおりである。

第 10 表 閉鎖群育種に切替えてからの総合成績

年度	育成率	父羽数	母羽数	短 期 成 績				初 産 日 令
				開始羽数	終了羽数	終了率	産卵率	
38	—	2	11	45	44	97.8%	74.4%	173
39	93	11	48	380	375	98.7	77.6	198
40	95	11	56	264	262	99.2	83.3	168
41	93	10	92	351	347	98.9	77.1	172

10ヶ月令 体 重	10ヶ月令 卵 重	周 年 成 績				
		短期終了に対する開始率	開始羽数	終了羽数	終了率	平均産卵数
1945 g	55.1 g	100%	44	39	88.6%	263個
1768	53.7	44	163	160	98.2	288
1792	56.7	53	138	122	88.4	257
1885	54.8	29	101	実施中		

註) 40 年周年成績の低いのは、台風 26 号により鶏舎倒壊による被害の関係である。

育成鶏より産卵調査をする羽数の選定は、収容鶏舎の都合、予算関係などで一定していない。短期成績の調査期間は無淘汰としてその性能を調査し、短期成績終了後は、春期初生びなの払下鶏舎収容の都合、予算関係などで周年調査をする羽数は一定していないので、成績の比較は短期成績が妥当と思われる。

B系統33 T-7家系の過去4ケ年の成績をみると、短期(初産から90~100日)の残存率は98%~99%と高く安定していると思われる。産卵率は40年度83.3%と非常に高い年もあるが、大体75~77%が33 T-7家系の産卵性能と思われる。

初生日令は39年198日と長いものもあるが、およそ170日前後が初産日令であるよう推定される。体重、卵重の変動の巾が多少大きいのは、家系別採取羽数が一定でないこともあり、体重は1800g前後卵重は55g前後の性能と推定される。

B系統33 T-7家系の今後の改良については(2)の改良目標でも述べたように、卵数系統としての性能の維持と整一性の向上を図りたい。